

## 入選

### おばあさんを通じて

群馬県 南中学校  
三年 湯浅 月渚

これは、一学期の最初と最後に体験したできごとです。

その日は一学期の始業式で、学校は午前中に終わりました。午後はなにをしようかと期待を膨らませながら、私は二人の友だちといっしょに帰り道を歩いていました。

「みんなはお昼ごはん、なに食べる？」

と聞いたとき、一人の杖を持ったおばあさんが、交通量の多い道路を歩道からはずれて歩き、急に立ち止まりました。その影響で車は止まり、中の人是不審な顔でずっとおばあさんを見ていました。そこで私たちは、おばあさんに向け寄り、声をかけました。するとおばあさんは、

「ごめんなさい。私、目があまり見えないの。どうやって歩道へ戻ればいいのか？」

と言いました。とりあえず歩道に戻ろうとしたとき、数台止まった車の中から、私たちと同じくらいの年齢の男の子が出てきて、おばあさんを助けようとしてくれました。

私はその行動と、男の子の優しさに胸が温かくなったと同時に、ずっと車の中にいて助けようとしないう大人たちへ不信感を覚えました。私たちは、おばあさんがまた道に出ないか心配で、団地の家までつきそうことにしました。

その道中、おばあさんは私たちにいろいろな話をしてくれました。事故により目が見えなくなり、何度も死のうとしたこと、不自由な目でどうやって生活しているのかなどを教えてくださいました。おばあさんを家まで送り、近くの公園の時計を見ると、午後1時を指していて、私はお腹がペコペコでしたが、心はおばあさんが喜んでくれたうれしさでいっぱいでした。

それから約3ヶ月後の夏休み直前、私は中学校生活最後の試合を団地の近くのテニスコートでしました。その帰り道、あのおばあさんが、暑い中でたくさんの荷物を持って歩いていたのです。私と前のできごとのときもいっしょにいた友だちと、二人でかけ寄り、

「手伝いますよ。」と言いました。するとおばあさんは、

「あれ。この声、前にも聞いたことある気がするな。」

と私たちの声を覚えていてくれたのです。嬉しかったけれど、逆にそれだけ声をかける人が少ないということを感じて、悲しくなりました。久しぶりの再会は楽しくて、話が弾みました。おばあさんを家まで送ったあと、大会の疲れが少し軽くなった気がしました。

私は、おばあさんと出会ったことにより、障がいを持っている人の生活や気持ちを深く考える機会をもらいました。車から出てきて助けようとしてくれた男の子のように、優しく手を差し伸べてくれる人もいれば、車から出てこないで、ずっと他人まかせにする人もいるのが今の社会の現状です。

障がいの有無に関係なく、困っている人がいたら、すぐに助けるのが人としてあたりまえではないでしょうか。みんながそんな気持ちを持つことは難しいことだけれど、あたりまえのことを普通にできる社会へと変わっていき、みんなが笑顔になれることを私は信じています。